

みことな細工に見入る参加者たち



その3

9月2日
参加者35名

「間瀬大工の匠の巧を訪ねて」

公民館研修と現地研修とがセットされた体験講座でした。この講座は、「間瀬大工の匠の巧にふれよう」と開催されたもので、当日はその間瀬大工匠集団の優れた技量によって建てられた寺院を一目見ようと三十五名が参加。最初は、そのすばらしい建築物の予備知識をもってもらおうとビデオでの鑑賞会が行われた後、現地研修へと出かけました。この日の見学地は、近郷に現存している建造物で、その代表的な吉田町の吉田神社、巻町竹野町の浄福寺の二カ所を見学。両建造物とも間瀬大

さて、九月二日に開かれた三日目の講座は、

工の技術の粋をあつめて建造されたもので、その精巧な細工や外観のすばらしさに参加したみなさんも一様にうなずきながら、あらためて、間瀬大工の匠のすばらしさを再認識していました。

「間瀬大工の素晴らしさを再発見」

近くにこんな素晴らしい建築物があるなんて全然知りませんでした。特に吉田神社の彫刻の素晴らしさには驚きました。当日は説明も詳しくしていただき、本当にこの日は、目と耳で間瀬大工の匠の素晴らしさを発見できました。



竹内スミさん
(和納7区・61歳)

本当にこの日は、目と耳で間瀬大工の匠の素晴らしさを発見できました。

その4

公開講座
11月18日
参加者120名

「炉ばたに集まれ」民話の集い」

八日は四回目の講座として、昔から親から子へ、子から孫へと伝承されてきた「語り」を再現しようと「民話の集い」が開かれました。当日、会場には炉が作られ、その雰囲気はまるで民話の世界そのもの。さっそく石塚ツル子さん(82歳)、本間タカさん(80歳)の語りの披露が始まると、会場内はしばし古き良き時代へ大変身。その心温かい語り口調に詰めた参加者らは、それぞれの幼い日を思い出しているかのように、目をうるませながら聞き入っていました。続いて、水沢謙一先生から民話についての講演が行われました。講演の内容は、身近な民話の紹介や民話

そして先月十

のルーツ、変遷などが分かりやすく解説されると、それを聞き入る参加者の顔は、懐かしさのあまり生き生きと輝いてみえるなど、楽しく、そして有意義な集いでした。

懐かしい思い出が、いま甦る

子どもの頃、よく聞いた「弥彦の枇杷の話」など、とまも懐つかく思い出しました。こんなすばらしい文化を埋めたいは、もったいない!としみじみ感じました。これからも大いに掘り起こし、教えてもらいたいものです。



後藤秋男さん
(和納12区・54歳)

たいものです。



特集/おらが村岩室ふるさと講座

今回ご紹介したふるさと講座の内容は、紙面の関係でほんの一部でしたが、実際の講座では、説明、現地研修と盛り沢山でした。ごとし参加できなかった皆さん、来年はぜひいかがですか、「ふるさと講座」に!

海外体験レポート

県農協青年部アメリカ農業研修

アメリカ農業を肌で体感

ことしも、新潟県農協青年部アメリカ農業研修が十月十八日から二十七日までの十日間で行われました。この研修は、アメリカ農業を視察しながら国際的視野を高めようと毎年実施されているもので、ことしは高橋の大関恒夫さん(41歳)が参加し、アメリカ農業の実態を視察してきました。そこでこの欄では、その研修レポートが届きましたのでご紹介しましょう。



大関恒夫さん
(高橋・41歳)

地域農業の中核者として、又後継者としてのリーダー的存在として、地域農業の発展のために後継育成に積極的に参加する。

やるというから、そのスケールの大きさに驚きました。このスケールですから、コメを生み出す生産コストも平均すると日本の八分の一のこのコストでは日本の低コストでも、とてもた

ちうちできない。しかしアメリカにも決定的な、弱点があった。その一つは水の問題で、年間の降雨量が二五〇ミリしか降らず、耕地はいくらあっても水がないので多くは作れないのである。第二は味が悪く、日本の味覚に合わない。これらを見ると、もし将来市場開放になった場合、うまい米作りをやっているならば、日本農業も何とかやっているといるのじゃないかと少しは思った。

次に、サリーナスの野菜地帯を視察。一農家、一企業で平均六〇〇ヘクタールで、営業部門、販売部門を設定し、企業的に農業経営している。農家は、生産技術は畑作コンサルタント会社にまかせ、生産コストの引き下げや、販売面で力を入れており、成功するかどうかは、経営能力一つに掛かっているという。そして日系成功農家との懇談や、奥田果樹農家の五十年間の苦勞話を聞いたり、ハリス牧場の二五〇ヘクタールの敷地の中に、十萬頭肥育という大きさにも驚きました。

実際に、この目と体で感じたアメリカ農業は、耕作面積、栽培方法など違うが、一企業、一農家という考えの中での生産から販売までというの、いい勉強になったし、これから私達農家も、消費者にも喜ばれる農業にしていかなければならないと思いました。

(紙面の都合で、途中を省略しました。)



村内農業青年グループが合同で 先進地視察研修

村内農業青年で組織する村経営者会議(代表堀越正木さん)と農業を考える会代表小林重道さん)の二グループ合同による先進地視察研修会(26名参加)が先月二十日行われました。当日は、首都圏生協との交流活動と産地直販事業の先進地である笹村村笹岡農協を視察。研修内容は、四季を通じた顔の見える交流を進めながら、農産物の直販事業に成果を上げてきた活動内容などを研修。参加者らは、その充実した活動や苦勞に感心すると共に、今後の農業意欲を新たにしていきました。

「アメリカ農業をみて」

今回十月十八日より十日間、新潟県農協青年部の研修に参加させてもらい、アメリカ農業を見てきました。二日間の事前研修である程度の予備知識で出発しましたが、気候、風俗、人情、習慣の異なる土地での期待と不安をいだし、同日サンフランシスコ到着。翌日からの視察となりました。

バスにゆられ、外を見る景色は、果てしない耕地、又耕地。そしてカリフォルニア州サクラメント・バレーにある米作りをしている福島県出身の田牧さんを訪ねました。作付面積は、八十ヘクタール。日本とは、まったく広さが違うし作り方も違う。一枚の田が二十五ヘクタール、レーザー光線を使つての代掻、種まきや除草剤・肥料まきは、航空機で



広大なレタス畑を前に、改めてアメリカ農業の規模を痛感